

た。53年度に見られた死亡個体は、最年長のメスがアカンボウと共に死亡した以外はなかった。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的・社会学的研究

森 明雄・三戸サツエ
冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回ほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、通年の変化や、個々のトピックについて調べている。

2) ニホンザルの行動のエソロジカルな研究

森 明雄・三戸サツエ
冠地富士男・山口直嗣

霊長類研究所のオープンエンクロージャーにおいて、行動の連鎖を解明するための記録を行なった。

3) 内部寄生虫に関する研究

薄井萬平・柳田孝司(宮崎大)
森 明雄

内部寄生虫卵の季節変化を、毎月1回、個体毎に採糞することにより、定量的に調べた。

なお53年度に本施設を利用した共同利用研究者は早木仁成(京大)、町田昌昭(国立科学博物館)、薄井萬平(宮崎大)である。その他、長期滞在し、利用した研究者は、鈴木延夫(北大)、星野次郎(京大)、久保田英史(京大)等である。本年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は、延べ484人であった。

また、昨年度にひきつづき、本年度も大学院学生による実習として、幸島でのフィールド・ワークが行われた(53年7月2日~7日)。

学会発表

ニホンザル幸島群における、体重変化から見たポピュレーション動態

森 明雄

第26回日本生態学会大会(1979)

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明
後藤俊二・松林伸子¹⁾

先ず特筆すべきことは、昭和54年度概算要求において繁殖コロニー設置が認められたことである。繁殖コロニー設置によって、研究用サル類の自家繁殖体制を整備すべきことの重要性については最早ここに改めて述べる必要はあるまい。当初の要求は屋外グループケージ8棟および育成舎1棟の建設であったが、その後京大本部との折衝によって放飼場1および育成舎1棟を設けることとし、協議員会によって承認された。これは繁殖コロニー設置を文教施設整備として扱い、そのためには小規模の建物を分散して設けるよりも、大規模なものに集約する方が要求実現の度が高いこと、また実際の維持管理のことを考えれば、いきおい人手のかからない放飼場形式を採らざるを得ないこと、などの理由に基づくものである。しかし3,000m²近い放飼場を本研究のキャンパス内に設けることになれば、所内全体の環境・将来計画、附近住民との関係、サル汚物の処理などについて余程慎重な配慮を必要とする。そのため、サル施設、サル委員会は将来計画委員会などと終始連繫をとりつつ、この要求案のとりまとめに当たり、協議員会においてその具体案の説明を行なった。要求の骨子は、研究所正門を入れて直ぐ東側、現在テニスコート、屋外グループケージ、旧検疫舎プレハブなどが並んでいる一面に、総面積約2,600m²の半地下式放飼場を設け、これを四区に仕切って夫々20~30頭(総数約120頭)の繁殖用母群を収容する。サルの種類は現在最も利用度の高いアカゲザル、ニホンザルとする。ここから毎年約60頭の仔ザルが生産される見通しであるが、これを育成舎に集めてはほぼ8才に至る迄育成し、実験に供する。育成舎の建設予定地は現在の共同利用宿泊棟西側の傾斜地である。このプランの実現について既に述べたように解決すべき幾つかの問題点があるが、力めて所内全般の意見を徴しつつ満足すべきものを完成したい。

今年度のサル施設運営について喜ぶべき他のひとつは、漸く運営費の増額実現(約230万円)を見たことである。このことについては、全国各地の動物実験施設からも年毎に強い要求が出されてきたのであるが、今年度遂に要求実現の運びとなったことは大いに喜ばしい。関係当局の理解と援助に対して感謝の意を表したい。

1) 教務職員

1977年に始ったインドのサル輸出禁止措置はその後も何等緩和の兆を見せていないが、ラオスからと見られるアカゲザルの入手は現在細々ながら途絶えていない。しかしその入荷群の体重、年齢等に関して言えば決して満足すべきものでない。このことは結局アカゲザルの代替としてのニホンザル、およびその他のマカク類の利用度を増す結果となった。今後もこの傾向は続くものと見るべきであろうが、アカゲ偏重の風を正して行く上ではむしろ歓迎すべきことであるかも知れない。

人事においても大きい変化があった。調理を担当していた中島昇（臨時用務員）は昭和53年6月30日付を以て退職、後任として小形敬太郎（臨時用務員）が、同年7月1日付を以て採用された。また才田春夫（技官）は日本海外青年協力隊員に応募、採用されたため、同年9月30日付を以て退職し、後任として釜中慶郎（技官）が同年10月10日付を以て採用された。

研究概要

1) ニホンザルの精子形成における季節的変動

千葉敏郎

高崎山・宮島・志賀高原C群について、繁殖期・非繁殖期における精子形成を観察し、その成績をシンポジウム・学会等において発表した。現在、引き続き実験室内長期飼育群について、同様な観察を行なっている。

2) 未熟ニホンザルにおける始原生殖細胞の動態

千葉敏郎

主として高崎山群の未熟個体について、精索内における始原生殖細胞の形態と運動を観察中。電顕による観察をも併せ行う予定。

3) サル類の精液性状に関する基礎的研究

松林清明

電気刺激法に依って精液を採取し、精子数・精液量・精子運動性・精子奇型率等の季節的・年令的变化を、主としてニホンザルを対象に見ている。精液の凍結保存についても試験を進めている。

4) 雄ニホンザルの性機能に関する形態学的研究

松林清明

精巣・精のう・前立腺の年令的・季節的・重量変化を調べると共に、組織学的検索を行っている。

5) 霊長類の眼底像に関する基礎的研究

後藤俊二

ニホンザルを対象とした、脈絡膜血行動態の観察・記録を目的とした赤外吸光造影法の検討を行なった。また、乳仔期を中心に成長過程における眼内視所見の推移の単色光および赤外線撮影法による観察を進めている。

6) ニホンザルの先天性四肢異常の実態調査

後藤俊二

共同研究として、各地で多発している四肢奇形の形態観察・臨床検査・染色体検査等の捕獲調査に参加している。

論文

- 1) Matsubayashi, K., Hirai, M., Watanaba, T., Ohkura, Y., Nozawa, K. (1978): A case of Patas-vervet hybrid in captivity. *Primates* 19 (4), 783-791
- 2) Matano, Y., Matsubayashi, K., Ohmichi, A. (1978): Scanning electron microscopy of mammalian spermatozoa. *Gumma Symp. Endocr.* 13:27-48

学会発表

1) ニホンザルオスの性成熟

千葉敏郎・和秀雄

プリマーテス研究会第

第1回談話会(1978)

2) ニホンザルにおける精子形成の季節的変動

— 特に精原細胞の態度について —

千葉敏郎・和秀雄

第85回日本獣医学会(1978)

3) マーモセット類の電気射精

松林清明

第13回日本実験動物学会(1978)

4) ニホンザルにおけるICG赤外線吸光・蛍光

眼底撮影について

福井正信・後藤俊二・古川敏紀

第85回日本獣医学会(1978)

5) ニホンザルの四肢奇形の形態的特徴に関する

考察

和秀雄・後藤俊二・峰沢 満

第23回プリマーテス研究会(1979)

昭和53年度サル施設経費概算

項目	金額(千円)
備品費	2,701
サル類購入費	746
サル飼料購入費	7,531
薬品費	755
消耗品費	1,085
人件費	5,868
雑費	312
計	18,998

昭和53年度(1978年)サル移動状況

昭和53年度(1978)未飼育頭数

項目 種名	入 荷			出 産	実 研 殺	事 故 死	管 理 不 良	死 亡							種 名	飼育頭数 (科研費分)		
	校 費	科 研 費	寄 附					呼 吸 器 系	消 化 器 系	循 環 器 系	泌 尿 器 系	代 謝 器 系	神 經 系	そ の 他			不 明	
コモンツパイ			1	3	1										6		5	
ワオキツネザル			2														2	
スローロリス									1								3	
オオガラゴ									1								6	
ヨザル																	5	
ワタボウシタマリン																	22	
シルバーマーモセット							1								2		7	
リスザル																	5	
ノドジロオマキザル				7	6			1							3	1	1	
フサオマキザル										1							2	
チュウベイクモザル											1						1	
ミドリザル																	2	
パタスザル						1											2	
ニホンザル			27	30	17	3			5			1		5			240 (27)	
アカゲザル	16		3	17	18				2	2			1	2	1		127 (23)	
タイワンザル			1	2	4												22	
ベニガオザル				2	2						1						10	
ベニガオザル				2	2							1					11	
カニクイザル					6												11	
ボンネットザル				2	5				1						2		7	
アツサムザル	4				5	1											12	
ブタオザル	2			2													2	
マントヒヒ				1											1		2	
シロテテナガザル																	2	
アジルテナガザル																	1	
チンパンジー		2															6 (5)	
小 計	22	2	34						10	4	1	1	1	1	19	4		
合 計		58		66	59	5	1		41									
総増加数 - 総減少数 = 124 - 106 = 18頭 (増加) 昭和52年度より18頭増加																		